

京都大学
平松文庫蔵

『和漢々和』翻刻と解題（下）

楊 昆 鵬

前号に続き、京都大学平松文庫蔵『和漢々和』後半部分、すなわち和漢・漢和聯句作品全十三点のうち、第八から第十三までを翻刻する。翻刻の後に解題として書誌・成立・作者等について述べる。

〈凡例〉

一 【八】～【十三】と百韻の順番を示し、各句に算用数字で通し番号を付した。

二 以下の百韻については次のとおり異本が存在する。

【八】国会図書館連歌合集23（以下甲と略す）、【九】甲、【十】甲、【十一】甲、【十二】甲、【十三】国会図書館連歌合集35（以下丙と略す）。

三 甲と丙を用いて底本と対校を行い、その結果必要と思われるものを百韻の末尾に【校異】として「作者名」「本

文」「句上」で示す。

四 仮名遣いは原本のままとし、漢字は通行の字体に改め、また合字を開いた。

五 明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に（某カ）と註記する。その他の事項は【備考】に記す。

六 破損等のため判読不能な箇所は□で示した。

〈翻刻〉

【八】

漢和

1 関 花 天 下 白

2 月に千里も霞きえ行

3 雁かへる春のうらはのなめして

友林

梧

水

4 波 閑 舟 自 輕
 5 潮 從 風 罷 退
 6 山 為 靄 披 遠
 7 朝 日 待 鳥 は ね くら を 羽 ふ き 出
 8 竹 の 林 そ か け ふ か く な る
 9 水 くら き 川 辺 や 雨 も け ふ ら ん
 10 涼 色 夏 雲 横
 11 螢 自 掠 虚 乱
 12 蟬 其 宿 露 鳴
 13 椎 の 葉 や 影 さ ふ ら し 夕 附 日
 14 潮 さ む くな る う ら の 山 麴
 15 易 馴 村 巷 鹿
 16 報 遠 月 楼 鯨
 17 昨 少 覚 非 夢
 18 時 う し な ひ て う き は 身 憚
 19 ま つ し さ に 年 へ し 中 と 行 別
 20 あ ら ぬ 形 見 に 庭 の 浅 茅 生
 21 掃 又 意 塵 聚
 22 そ む く へ き 世 に お も ふ 嬰
 23 雪 竹 立 難 掙
 24 海棠 恨 深 彭
 25 の と け さ も ひ ろ き 台 は こ と さ ら に

舜岳 英岳 光勝 昌侃 宗順 玄的 楚崑 友林 舜岳 水
 舜岳 英岳 光勝 昌侃 宗順 玄的 楚崑 友林 舜岳 水

26 領 春 歌 吹 城
 27 孤 宵 添 寂 雨
 28 は かな む か し を し の ふ 五 更
 29 立 花 の か ほ る や は と ふ 杜 鵑
 30 境 佳 忘 旅 程
 31 舟 人 も お も は て くら す 浦 つ た ひ
 32 乍 嵐 波 未 平
 33 ち り 初 て 露 や 尾 花 を さ そ ふ ら ん
 34 床 を う つ ら の は な れ た る 声
 35 愛 月 盤 旋 野
 36 残 る あ つ さ も さ そ 草 の 営^{イホ}
 37 焼 け つ も ま た あ く た 火 の か け み え て
 38 け さ ま て 守 る 明 居 悲 し き
 39 官 路 無 謀 鄭
 40 賊 庭 為 治 卿
 41 斉 墻 羊 世 事
 42 か た へ は 草 の と ち こ も る 閑^ヤ
 43 花 の 後 我 と ふ 友 も 夏 の き て
 44 空 送 夕 陽 傾
 45 釣 舟 も う か へ か ね た る 沖 津 波
 46 沙 狂 鷗 睡 驚
 47 雁 群 閑 界

光勝 英岳 宗順 昌侃 楚崑 玄的 友林 水 舜岳 昌侃 宗順 梧 水 舜岳 梧 友林 光勝 昌侃 英岳 水 玄的 楚崑 舜岳 光勝 梧 宗順 昌侃 舜岳 友林

48 兔翫雅筵評
 49 なかきをもあかすねぬよのましはりに
 50 すゝめくれての袖の鱗
 51 何足言郷話
 52 更聴忘旧盟
 53 幻の便はかりになくさめて
 54 返魂香縷縈
 55 漢歟炎酷処
 56 舟には風の絶ぬ火瀛
 57 嶋山もかくれぬ波の朝霧に
 58 湊旻乗鶴丁
 59 豊登知郭是
 60 半の秋の月は在明
 61 あはれさは分て今夜の衣／＼に
 62 愁霖竟未晴
 63 うらむるに猶
 64 まさる方にやつける世情
 65 是非恩蝶幸
 66 ひとく／＼とつくる鶯
 67 おらせしと梅の花寺木のもとに
 68 修籬厭六霏
 69 凍吟誰近履

梵壺 梧 宗順 英岳 舜岳 玄的 光勝 梵壺 梧 宗順 友林 舜岳 水 昌倪 英岳 玄的 光勝 昌倪 水 梵壺 友林

70 朝佐好調羹
 71 惟肖鐘中面
 72 いつれおとりもあらぬ弟兄
 73 うしろみのいとむ位はさたまらて
 74 身にしめてやる車轟く
 75 住さとも片路もわかぬ夕霧に
 76 躊躇待月盈
 77 属花専夜寵
 78 あをやきうたひならず爪箏
 79 いほをいつれはかすむ春の目精
 80 立花もおしのに少咲つほみ
 81 水を結ひてかへる閼伽棚
 82 祖心明歴々
 83 殺氣鉄鋒々
 84 置霜をなれもやわふるきり／＼す
 85 砌荒月独澄
 86 野分せしあとさりけなき暮れさひし
 87 霧暗道聴瑩
 88 吹笛は妹にきけとの前わたり
 89 いつよりふかきこころ并（うちか）
 90 艶語芥針釣
 91 故交葭玉栄

舜岳 英岳 梧 昌倪 宗順 玄的 水 舜岳 友林 玄的 梧 昌倪 友林 宗順 光勝 水 舜岳 昌倪 梧 友林 光勝

92 あやしきは撰ひに人し和歌

93 継晷対書繁

94 白賁我廬雪

95 ひらきて花の木末呈す

96 あたゝかに檜原もなれるはつせ山

97 霞籠院々薨

98 磬昏声漏永

99 おこなふおりはつれ／＼も禎

宗順

英岳

舜岳

梧

水

梵峯

友林

玄的

梧 十二句 宗順 九

水 十句 玄的 九

舜岳 十一 梵峯 九

英岳 九 正忠 一

光勝 九

昌倪 十

【校異】

【本文】 29はとふ―いとふ、67おらせし―おらせち、79日

精―火精

【備考】 78句と79句の間に一句欠か。

【九】

和漢

1 冬さくや木の芽もまたぬ園の梅

2 臘温鶯語新

3 雪融溪水漲

4 霞にもれて明る河なみ

5 長閑なる蘆の葉分の夜半の月

6 かへり残りて雁のなく声

7 故山雲勿隔

8 聖代道猶淳

9 扑野壤歌切

10 凝烟波律句(ヨカ)

11 色めける袖は箔のうちにして

12 物見の場につとふ小車

13 楽只行窩邵

14 かけにならへる花のいく本

15 九重の瓦は柳に奥ありて

16 詩筵好弄春

17 度／＼に霞やくみもそへぬらん

18 塩屋に波のちかき海つら

19 探景舟容与

20 嘗岨鞋苦辛

兼如

玄召

有節

紹由

宗順

兼達

集雲

惟舟

友竹

中岬

意運

令順

玄召

兼如

紹由

有節

兼達

宗順

惟舟

集雲

21 帰樵多荷月
 22 天槿暫榮晨
 23 置露も籬のうちにしつかにて
 24 秋の小蝶そねふるまゝなる
 25 園自日昇色
 26 世依隠偽塵
 27 うきはたゝよはひの後の宮つかへ
 28 岩栖苦衣我
 29 すゝしさならす松陰の道
 30 雨余螢数点
 31 時五貝千諄
 32 朝夕に窓の灯かゝけそへ
 33 励学費吟呻
 34 むかひつゝさらにねぬよを月もしれ
 35 秋になすをし待てくやしき
 36 みとりの袖をあはれいつまで
 37 巻返しうつは形見の礎にて
 38 艶簡又傷身
 39 玉臂合欵枕
 40 蒼顔満鬢銀
 41 徂年遅掣電
 42 異域仰巖宸

中倬 友竹 兼如 意運 有節 玄召 宗順 集雲 兼達 友竹 惟舟 意運 中倬 紹由 兼如 紹由 兼達 集雲 惟舟 玄召 中倬

43 はこふにも猶絶ぬこそ御調なれ
 44 夏毎にしもかる氷室山
 45 入方は木ふかりける松か崎
 46 霧によるへをまよふ江の舟
 47 期月叫雲雁
 48 暮つゝもたゝすさましき空
 49 販歟花乱落
 50 すみれの露を分わくる袖
 51 ふりにける砌は春の野と成て
 52 照残牧笛頻
 53 某林鴉有恋
 54 たかねは雪もうすき山もと
 55 立のほるけふりや絶ぬ里ならん
 56 嵐浮市動帘
 57 かた／＼に汀の舟の行つくし
 58 宿葦驚振々
 59 波穩漁垂釣
 60 曉粧女効顰
 61 別での涙かなしき月の下
 62 夢の枕にかよふあき風
 63 梧翻窓乍雨
 64 あへす夕はあつさきえぬる

兼如 意運 宗順 紹由 友竹 兼如 兼達 友竹 集雲 宗順 紹由 兼如 兼達 友竹 兼如

65 一坂をこえつゝやすむ岩かくれ
 66 過棧杖頭皺
 67 仕只覺移蜀
 68 通長合在莘
 69 籍由耕則筆
 70 よむ言の葉もあら玉の年
 71 奏春蛙鼓吹
 72 かすみもふかきやり水の末
 73 ちる花や猶ゆふはへの池の浪
 74 夏をかけたるかけの款冬
 75 患始鵲聽漸
 76 庵さひしきむら雨の空
 77 抱独月遮莫
 78 身にしめてうき努／＼のあと
 79 涙訝露珠墮
 80 摘てむかしをたゝ忍ふ草
 81 立かへり住ぬる宿の軒はあれて
 82 携朋愧巷貧
 83 草むらやうふるをまゝに茂らん
 84 塚廢織碑泯
 85 ゆきかひものな^(の堆雪)かみちは絶はてゝ
 86 潦早幾劳民

宗順 中皞 玄召 集雲 有節 意運 惟舟 兼如 紹由 兼達 友竹 宗順 集雲 意運 中皞 紹由 兼如 友竹 兼達 玄召

87 政莫如殷夏 友竹
 88 雄其入魏秦 有節
 89 威而文有虎 惟舟
 90 すくせの程を思ふあやしさ 宗順
 91 閑作松連理 集雲
 92 月の行衛のみねの杉むら 兼如
 93 霧間より明そむる夜の鐘なりて 意運
 94 とめしもいつる秋のうら船 兼達
 95 吹もたゝたゆみにけりな奥津風 宗順
 96 灘頭先擲綸 友竹
 97 かたやまのかくれはまたき日の落て 兼如
 98 路杳幾鞭驪 有節
 99 霞擁探花後 集雲
 100 村賒指杏醇 中皞

【校異】
 兼如 十二 兼達 九 意運 九
 玄召 七 集雲 十 令順 一
 有節 十 惟舟 七
 紹由 九 友竹 九
 宗順 九 中皞 八

〔作者名〕 39（無記）——惟舟、40惟舟——有節、49友竹——有節

〔本文〕 10句——勻

〔備考〕 36句が27句と28句の間にあるとの指示あり。

【十】

- 1 梅 橋 鶯 進 歩
- 2 雪 間 と め い る 谷 の 戸 の 春
- 3 晚 霞 添 月 色
- 4 風 た え 〳 〵 に の と か な る 旻
- 5 お り ゐ し も さ そ は れ 帰 る 雁 な き て
- 6 郷 異 隙 陰 頻
- 7 露 経 客 衣 湿
- 8 霧 の ま か ひ に つ な く 川 輪
- 9 柳 ち る つ 〴 〵 み つ た ひ の や 〴 〵 暮 て
- 10 涼 浅 覚 秋 臻
- 11 月 を 待 袖 に 吹 た つ 風 の 声
- 12 ほ た る み た る 〴 〵 軒 の く れ 笏
- 13 閑 な る こ す の 外 面 の 雨 そ 〴 〵 き
- 14 万 感 苦 吟 身

西 咲 喬 閑 室 芳 生 中 嶧 竹 郷 玄 仍 昌 琢 承 章 友 益 良 益 喬 西 咲

- 15 打 む か ふ つ ね の 灯 か 〴 〵 け そ へ
- 16 景 勝 古 寺 新
- 17 西 斜 鐘 赤 脚
- 18 と を き 山 路 を い そ く 柴 人
- 19 時 雨 に や む ち う つ 駒 も な つ む ら ん
- 20 風 過 野 水 鄰
- 21 暗 香 花 在 近
- 22 よ る も 花 さ く や と り こ そ 問^{問也}
- 23 春 莫 如 交 友
- 24 く む さ か つ き に あ か す 巡 れ る
- 25 多 情 催 興 夕
- 26 波 に う か へ る 舟 は 難 波 津
- 27 影 も た 〴 〵 芦 間 の 月 は さ や か に て
- 28 秋 の ち と り に つ な く 日 酸 銀
- 29 霧 消 佳 境 漸
- 30 烟 裊 御 炉 勻
- 31 お こ な ひ や 仏 の 前 に 絶 さ ら ん
- 32 な を め る へ き の た ち ゐ 馴 け り
- 33 あ は れ さ は 翁 さ ひ た る 姿 に て
- 34 旦 昏 攀 杖 鱗
- 35 今日 毎 に わ く る か り は や 速 か ら ん
- 36 層 嶺 路 嶙 峋

生 閑 室 竹 郷 芳 玄 仍 昌 琢 承 章 中 嶧 西 咲 友 喬 芳 生 嶧 竹 玄 仍 昌 琢 友 益 喬 西 咲

37 樵自笛楊懶
 38 いほりの方にちかきさを磨
 39 ほにほ出る田面の末のほのめきて
 40 薄にほそき月は珍し
 41 聴蟀入荒野
 42 伴鷗至水浜
 43 もとむるはうき世の外の住所
 44 竹蔭点無塵
 45 官路是非界
 46 いひなしからそ罪に湮める
 47 隔洛田千里
 48 文のたよりをたつねこそ因_レ
 49 みせはやの花は忍ふるかことにて
 50 桜揺攀素唇
 51 彩霞山絵事
 52 あさけのなかめしはし_ヲ瞞
 53 初雪にひらきいてたる窓の内
 54 学不厭霜辛
 55 かしこきはいさめの程のしるかれや
 56 あふくこそたゝ此君と臣
 57 分ならず道もたゝ敷春日山
 58 恩露草蓂々

竹郷 芳 玄 仍 昌 生 友 喬 玄 西 竹 生 芳 喬 玄 昌

59 萩か枝やうつろひやらぬ花の色
 60 欄上月精神
 61 妨夢曉砧響
 62 余粧湖鏡顰
 63 氷ぬるしかの浦浪よせかへり
 64 松風さむしはらふ蕨
 65 溪似奏琴韻
 66 雲の衣や舞人の領巾
 67 遺跡楊妃襪
 68 したわれしたふ中そ親しき
 69 堅約膠投漆
 70 打かたらふにこゝろ均_{シモ}
 71 みたれ碁を猶いか計いとむらん
 72 生涯占隠淪
 73 おとろふる身の絶／＼を思ひ侘
 74 ふるき枕の露の横陳
 75 事とふはかたはらさひし夜半の月
 76 床すさましみとかぬ裏紐
 77 対花談未了
 78 試筆字皆真
 79 唐もけふあら玉の年越て
 80 泰平祝禁宸

友 承 中 竹 玄 昌 西 友 閑 生 承 芳 昌 中 喬 玄 生 昌 西 竹 玄 閑

81 家の風吹つたへてのまつりこと
 82 氏の未まで誰も遵^キ
 83 百世名何朽
 84 高堂材以掄
 85 芸園丘種徳
 86 今に路ある道淳^{ナリ}
 87 国被蘇霖手
 88 涼しき方にこゝろ伸ぬる
 89 酔にける後は端居の枕して
 90 あかすもむかふ月の倫
 91 山西欣霧霽
 92 舟さしくたす秋の川根
 93 浪かゝる竹の葉分の明そめて
 94 旅行袖にをくれぬる辰
 95 出存帰路遠
 96 心をうつす花そ湊もる
 97 車輕和暖蝶
 98 曆檢記正寅
 99 永日雅遊幾
 100 とのつくりせし春の賓
 西咲 十二 中暉 八

芳 友 承 西 竹 生 喬 昌 玄 西 芳 友 喬 昌 玄 西 芳 友 喬 昌 玄 竹

喬 閑室 九 玄沙
 生 八 昌琢
 芳 八 承章
 竹郷 九 友益
 良益 一
 一八七十一
 【校異】
 【本文】 55しる—さる
 【十一】
 慶長十二年十二月十七日
 和漢聯句
 1 おしみみよ月の光に雪の窓
 2 凍吟天欲明
 3 かすかにも鐘は枕にひゞきて
 4 尾上おろしの吹送る袖
 5 乍雨松涼色
 6 深秋葉水程
 7 鴈のなく川辺に舟をひきとめて
 8 白沙夕霧横
 松 糸 峯 玄 令 貝 中 生

9 月 虧 村 笛 遠
 10 座 静 午 茶 烹
 11 良 話 忘 非 百
 12 と も に さ そ は れ 人 山 の お く
 13 つ か れ て も 狩 は や あ か め 道 な ら ん
 14 な か れ の 末 に 馬 草 か ふ 暮
 15 騰 莨 橋 辺 柳
 16 進 雛 火 底 笙
 17 宮 詞 王 拔 萃
 18 お ほ け な き に も ま し は れ る 袖
 19 と け や ら め 中 の 心 は 物 お も ひ
 20 独 床 涙 枕 盈
 21 ち る 花 の 宿 は あ は れ に 立 別
 22 涯 如 風 蝶 輕
 23 婆 娑 春 舞 乱
 24 く め る な さ け の 酔 そ し ら る
 25 月 に 猶 過 し む か し や か た る ら ん
 26 壁 聴 虫 以 鳴
 27 鐘 從 楓 寺 暮
 28 波 に よ せ くる 江 の と ま り 舟
 29 厭 寒 漁 罷 釣
 30 雪 に 絶 た る あ し の 屋 の 道

温 慶 皀 生 令 貝 崑 温 皀 生 松 糸 生 温 貝 皀 玄 令 糸 崑 温 生 皀 貝

31 一 村 の さ と や さ ひ し く あ れ ぬ ら ん
 32 鳥 去 四 無 声
 33 聳 翠 山 遮 曉
 34 雨 より 後 は き ゆ る う き 雲
 35 ほ の か に も 空 に ひ か け の さ し う つ り
 36 臨 渚 市 人 争
 37 塩 竈 典 蓑 賑
 38 玳 筵 鍊 句 賡
 39 か を と め て 立 さ り や ら ぬ 菊 の 本
 40 山 路 の 露 に ぬ れ る
 41 乗 駒 や 秋 の 夜 を こ め 出 け ら し
 42 景 無 如 月 清
 43 閑 窓 書 有 味
 44 世 を の か れ つ
 45 吾 友 除 花 少
 46 お し む に くる し 春 は わ ひ し も
 47 鵲 啼 知 夏 近
 48 象 至 作 田 耕
 49 す な ほ な る 時 こ そ あ ふ く 例 な れ
 50 御 調 に つ と ふ 袖 の い ろ
 51 唐 や う か へ る 舟 を ま つ ら か た
 52 あ は せ は し な の い か に 哥 と 詩

令 玄 崑 糸 生 温 皀 生 貝 松 糸 生 温 貝 皀 玄 令 糸 崑 温 皀 生 令 貝 生 温 玄 糸 皀 令 皀 生

53 不糸才 錦綉
 54 ゆるすくらゐもかつらおる人
 55 釣簾の外のひろき御まへは秋涼し
 56 夜遊月 慰情
 57 あかす猶露の玉琴しらへそへ
 58 林陰聞 老鶯
 59 晚霞婦 神温
 60 さりし仏をとひすつるあと
 61 那説潮 揚梵
 62 如磨月 掛鉦
 63 樹從峰 睹秀
 64 たえ間あらはす雲のかけはし
 65 一とをり空に嵐やすさふらん
 66 臘余 飛六霽
 67 かるもたゝ青柴なからつかねをき
 68 しつかすまゐはちかき片岡
 69 愧漏 補茅屋
 70 学真 揮管城
 71 灯をかゝけそへつゝむかひなれ
 72 鰈臥 夢雖成
 73 あやなくも涙にくもる夜半の月
 74 かきり今はの別すさまし

生 貝 皀 生 玄 峯 貝 令 温 糸 生 皀 峯 玄 令 温 皀 貝 玄 生 糸 峯

75 愁媒 砧杵 切
 76 佳客 酒盃 傾
 77 かへるさを忘れて花にかり枕
 78 かたのゝ原のかすみぬるくれ
 79 翼倦 休巢 燕
 80 客其 入地 蝗
 81 年豊 歌美 政
 82 ひらき置つゝこゆる関の戸
 83 した待も心はしるき閨の内
 84 毎遇 結山 盟
 85 すゑかけて思ふこそたゝいもせなれ
 86 いとけなきよりおふしたてぬる
 87 養笋 園添 竹
 88 かすみのまかき引かこふかけ
 89 氷綻 知温 洛
 90 邦危 围陣 营
 91 はるかなる野山も月に分けらし
 92 田つらにかよふさをしかのこゑ
 93 颺過 秋霧 散
 94 時雨しそらをのこす川浪
 95 かさなれる岩間／＼に落瀧津
 96 さすかゆへある庭もふりたり

生 貝 令 玄 貝 令 峯 温 生 皀 令 生 貝 峯 皀 玄 令 糸 峯 温

97 掖垣花世界
98 春夜月簷檻
99 山の端は霞なからに明はなれ
100 試筆賀新正

温 暉 糸 峯

生 十五 糸 十一
中 暉 十二 宗松 二
貝 十二 寿温 十一
令 十二 光慶 一
瑞玄 十二
梵釜 十二

【十二】

慶長八年十月廿五日

漢和

1 雨寒山半雪
2 木葉みたるゝ窓の明方
3 片敷の枕の月に日は覺て
4 声々雁一行
5 霧開村路顯

有節 杉 兼如 梅印 隆尚

6 風急晩潮狂
7 なひきそふ蘆分小舟漕かへり
8 きしねの竹の陰の涼しさ
9 村雨をすくせる袖のやすらひに
10 かりよる宿は里の傍
11 鐘響認出寺
12 曆新記孟陽
13 花さかりななき日数を待はかり
14 霞くまむの友の倡ひ
15 雅席誤帰計
16 深閨余淡粧
17 会期多託月
18 曲節屢歌商
19 置ひまもあらず扇をふれ／＼て
20 今朝まで露の絶やらぬ床
21 あらはなる軒はもり入村時雨
22 猶はた音のあらき山颯
23 托蔭緑重暈
24 花園紅衆芳
25 夕日さす方にみたれて飛胡蝶
26 春をふかめてかこふ草牆
27 真隱喜躋少

秀賢 也足 時能 兼達 元知 実顯 有 杉 如 印 尚 秀 杉 時 也 元 達 杉 印 如 時 節

28 終宵愛話長
 29 なさけたゝすゝめそへたる月の下
 30 山のきくにかへさ忘るゝ
 31 分てこし袂は霧にぬれ／＼て
 32 旅泊毎思郷
 33 驚立知汀淺
 34 鳳雛呈世祥
 35 桐の葉の翻により秋待て
 36 夕立越しも露そ彰
 37 乘風雲變黴
 38 舟にまかする身や荒唐
 39 掃又生愁種
 40 中に絶ぬはつらき伴
 41 いはけなきをたのみそめての物おもひ
 42 なにとか便いひ伝けん
 43 俄にもわふる宿にも方たかへ
 44 築城扱日良
 45 大原にしむる春日の神にして
 46 老松経幾霜
 47 陰よりもかけに紅葉の散つくし
 48 月に暮行すゑの竹岡
 49 さをしかの声は田面に遠からて

杉 達 元 也 節 尚 秀 時 如 節 杉 印 如 達 時 也 秀 杉 印 如 元

50 影冷水琳琅
 51 成百坡何是
 52 報仇呉必亡
 53 戦図山卓戟
 54 智略海容囊
 55 はるかなる舟ちの麻のとり／＼に
 56 風につれつゝ浪そあれぬる
 57 一方に枯生の尾花しほれはて
 58 冬かけてしもなく蟹
 59 籬外霜埋断
 60 笠中冢蓋蔵
 61 道遠きことあやまりの哀しれ
 62 ちかきゆかりも心障る
 63 月夜々過客
 64 たゝすみならすみの瀨（ほそとのカ）
 65 残りぬるあつさを袖にくるしみて
 66 病来霊葉嘗
 67 挟飛仙翼丈
 68 雲も高ねもひとつ旁
 69 富士川の嵐そ雪に吹のほり
 70 白暮好維鯉
 71 柴人やはこひつくして帰らん

節 秀 杉 印 節 也 如 時 元 節 杉 達 尚 如 如 杉 印 時 元 節 達

72 遠林有笛揚
 73 秋寒きあかつき月の里神楽
 74 露より後や霜攘らん
 75 霧かくれ絶く風のそよき出
 76 百砌草茫々
 77 とふかけは朽木なからの春の藤
 78 和暖鳥声忙
 79 流激覚氷泮
 80 竹の落葉を泊湘さかなみ
 81 浦吹萍離岸
 82 空にほたるのかけそ昇れる
 83 鐘月書何倦
 84 しとろに露のふる板廂
 85 暮ぬれは砌の荻の音そひて
 86 ししく成ぬるかけの篁
 87 鶯のひなをつれつゝ巢を出ぬ
 88 幽谷隔春光
 89 絶野有花洛
 90 少年賞高楊
 91 遊車蔽錦飾
 92 健筆製全章
 93 よしあしをゑらふにわかつ和哥

秀 杉 如 時 杉 也 尚 節 達 杉 元 印 時 如 杉 秀 印 節 尚 杉 也 杉 元

94 おさまるときそあふく皇
 95 かしこきに島の外まてなひきゝて
 96 傾誠旧献筐
 97 嫁唯堅約日
 98 情是見詞場
 99 妾秘合歛枕
 100 けはひも殊にふかき衣の香
 如 時 節 杉 印 尚 也

有節 十二 入道前侍從中納言 十
 杉 十六 時能 十
 兼如 十 兼達 八
 梅印 十一 元知 八
 隆尚朝臣 七 実顯 一
 清原秀賢 七

【校異】
 【本文】 23 托―松、 76 百―古、 80 落葉を泊湘―落葉をさそ
 ふ泊湘

【十二】
 寛永十五年十二月廿六日

和漢

- 1 君は千世さりともしめ歳の暮
- 2 操清傲雪松
- 3 排寒奇夜月
- 4 雁かへり行しのゝめの空
- 5 風かすむ浦舟とをく漕出て
- 6 雨のとかにもはるゝ海原
- 7 浪涌山遊日
- 8 嗽昇霾潜蹤
- 9 志高増撃鶴
- 10 かよふ真砂の末はるかなり
- 11 毬場欣夕可
- 12 瓊舍隔天重
- 13 白雲のいつこか思ふ方ならん
- 14 梢もかえて行郭公
- 15 夏かけて咲はまれなる藤かつら
- 16 触微池水涼
- 17 月依分影百
- 18 山毎見霧縦
- 19 羈客吟秋鳥
- 20 浅茅か原にやとりさへなき
- 21 古跡はたゝ花のみをあるしにて

- 前関白
棠陰
光勝
阿野前大納言
滋野井中納言
最岳
九岩
棠陰
光勝
阿野前大納言
前関白

- 22 かすみのかこふ暮のさひしさ
 - 23 春雨にぬれてとふこそ友ならめ
 - 24 手折はあやし款冬の色
 - 25 忍去透衣蝶
 - 26 号寒彈鑷蜚
 - 27 吹霜羞鬢改
 - 28 謫瘴減心惊
 - 29 なけきしてかよはくなる身の行衛
 - 30 松のねさしのあらはれし中
 - 31 五月雨に池の島にも波越て
 - 32 移蓬貯景濃
 - 33 墮凡仙置散
 - 34 祭考子陳供
 - 35 涙にや月も曇れる藤衣
 - 36 悲しき秋はめぐり来にけり
 - 37 露よりもあたし命の消やらて
 - 38 あはれ枯野にほそき虫の音
 - 39 色挙無名草
 - 40 むすひもあへぬ庭の朝露
 - 41 明投窓就日
 - 42 白尽瀑含峰
 - 43 笑列送脩遠
- 滋野井中納言
前関白
最岳
九岩
棠陰
光勝
阿野前大納言
最岳
九岩
棠陰
光勝
阿野前大納言
前関白
最岳
九岩
棠陰

- 44 詩こそなさけも人にすゝむれ
 阿野前大納
 45 一すちになかれて絶ぬみ川水
 光勝
 46 恩渥有時逢
 最岳
 47 あまたゝひもれしもつゐはあかためし
 最岳
 48 洛令花愛鐘
 棠陰
 49 夕月夜光ほのめく柳陰
 九岩
 50 鴉過煙薄籠
 前関白
 51 婦歟雖隱市
 光勝
 52 雪にやたえん三輪の中道
 最岳
 53 溪風杉滴翠
 阿野前大納言
 54 苔のむしろにあかぬ涼しさ
 滋野井中納言
 55 瓊観露凝彩
 光勝
 56 唐めく舟そ月に棹さす
 棠陰
 57 糸竹の折から秋のしらへにて
 九岩
 58 親迎倒屣邕
 最岳
 59 慰聴加綺語
 前関白
 60 得活賜環封
 滋野井中納言
 61 住吉の神はたのみしかひありて
 最岳
 62 風閑舟往從
 最岳
 63 をとろかぬ鳴や蜃になれけらし
 前関白
 64 蘆屋の末の日はかすかなり
 滋野井中納言
 65 乍霽騁遐眺
 最岳
 66 狩行袖にあられちる山
 光勝
 67 失路認梅縞
 前関白
 68 ふかき霞にこもるわか園
 九岩
 69 和主鶯懷恵
 最岳
 70 才臣鵬告凶
 滋野井中納言
 71 月さへもこくらき宿は物わひし
 棠陰
 72 爽籟動訛蹕
 阿野前大納言
 73 独居をしるこそ袖の露ならめ
 光勝
 74 窄愁褰積胸
 前関白
 75 日をへてもをこたりやらぬわらはやみ
 阿野前大納言
 76 困睡髮髻鬆
 最岳
 77 薪おふ翁も花にやすらひて
 光勝
 78 つくしやかへる山つとにせむ
 棠陰
 79 鵲啼春向暮
 九岩
 80 あはれましらの声うつむ雲
 前関白
 81 巴雨迷亭埃
 阿野前大納言
 82 渭川混漾溶
 最岳
 83 世塵千竹避
 光勝
 84 おほえこちたくなるかたち人
 棠陰
 85 似たるをやむかふ鏡に忍ふらん
 九岩
 86 徹曉促粧鐘
 前関白
 87 末いそく旅ねの枕しきすてゝ
 阿野前大納言

〔解題〕

【書誌】

前回の書誌記述の補足として改めて以下に記す。写本袋綴一冊、縦一三・八cm×横二〇・六cm。白の綴糸。薄黄土色の紙表紙。左肩に外題「和漢々和」と打付書きする。本文料紙は楮紙。見返は本文共紙、覚え外題が透いて見える。全五十四丁（墨付五十二丁。白紙、頭一丁・尾一丁）。後半葉十三行。奥書なし。本文料紙と文字から、江戸中期の書写と思われる。

底本として用いた平松文庫蔵本の他に、作品によって甲（国会図書館連歌合集23）・乙（国文学研究資料館蔵『和漢聯句』）・丙（国会図書館連歌合集35）の諸本が存在する。このうち、甲本は底本に比較して正確な本文を持つており、原本に近い写本であると考えられる。例えば底本では【九】10の最後の文字を「句」とするが、甲では字形から「句」とする。押韻からは底本「句」は誤写と考えられる。また、【十二】23の最初の文字は底本では「托」となっているが、これでは一句の意味が通じず、付句24とも対句にならない。一方、甲の「松」は句意も適い、端正な対句になる。これも底本の誤写かと思われる。

- | | | |
|----|-----------------|--------|
| 88 | 里千挑月節 | 最岳 |
| 89 | 嘗岨蘿費挽 | 棠陰 |
| 90 | 露霜ふかきうつ山の陰 | 滋野井中納言 |
| 91 | 小田刈あけてころもうつ也 | |
| 92 | いとなみは時そともなき賤か身に | 前関白 |
| 93 | 用顯伝岩備 | |
| 94 | 驚上疑星動 | 最岳 |
| 95 | 夕立過て暮かゝる嶺 | 阿野前大納言 |
| 96 | かへりくる道やとをちの里ならん | 滋野井中納言 |
| 97 | ほのかにみえし軒端ふりたる | |
| 98 | 感春花有恋 | 九岩 |
| 99 | 媚奥李何秋 | 棠陰 |

【校異】

【本文】 9撃―繫、13いつこ―いつみ、16微―風、45川水―御溝、91（一句欠）―秋風のもりあらしたる廬の中
阿野前大納言

【句上】 前関白 十三／棠陰 十二／光勝 十二／阿野前大納言 十二／御製 十五句／滋野井中納言 十／最岳 十二／九岩 十二／定逸 一

【備考】 90句と91句の間に一句欠との指示あり。また97句の作者滋野井中納言は98句の作者であるとの指示あり。

【成立】

平松家代々の蔵書を収める平松文庫には、十点余りの和漢聯句資料が所蔵されており、近世初期までの数多くの作品を含む。平松家は平松時庸が西洞院家から分家して興した一家である。平松家の遠祖で時庸の父である西洞院時慶と兄の時直は、本書作品に多く出句しているだけでなく、天正年間から江戸初期にかけて天皇・上皇の近侍として和漢御会に活躍し、有力な作者であった。その様子は西洞院時慶の日記『時慶卿記』に記録されており、当時の和漢聯句活動を知る上でも貴重である。また、時庸自身も寛永十年七月七日和漢聯句御会(国会連歌合集35)に名前が見え、寛永十三年七月四日漢和聯句(国会連歌合集16)の発句を詠むなど、和漢聯句の創作に参加していた。このように、和漢聯句を学び、作り、伝える伝統が、西洞院家そして平松家にあり、その中で本書は制作されたと思われる。

本書所収の和漢・漢和聯句十三点は、文禄から寛永年間にかけての約半世紀に渡り、時代の幅が大きい。その選出の基準は不明瞭で、全体に何らかの共通性・統一性を見出すことは困難である。天皇・上皇主催の禁裏・仙洞御会の作品もあれば、禅僧や連歌作者が主体のものもある。またその配列を見ると、年次不詳のものを除き、元和から始まり、文禄の次に慶長、最後に寛永と年代順の乱れが日立ち、

統一を図る意識があまり見受けられない。恐らく本書は自家の参考として書写されたものと推測される。

しかしこれら作品の制作時期と作者などが多様であるだけに、中世末尾から近世初頭にかけての和漢聯句活動の総体を窺わせる資料となり得よう。この時期の和漢聯句は連歌の発展と相まって、室町期の成長を経ていよいよ隆盛を迎えているところである。以下では制作年次の明確な作品を年代順に並べ直して、その成立を追ってみたい。

まず、【七】は文禄二年(一五九三)四月二十日から二十二日までの間に、後陽成天皇が主催した禁裏和漢千句の第六である。この千句興行は後陽成天皇にとって二回目となる。一回日は天正十九年(一五九一)四月二十一日から二十三日に行われたもので、天皇は即位して五年日、まだ二十歳過ぎの若き頃であった。本千句開催の様子については『近世初期文壇の研究』(小高敏郎、明治書院、一九六四年)に詳しい。その後しばらく禁裏和漢御会の記録が見えず、勉強に集中し力を蓄えたのであろう、二年後に再び千句を張行することとなったのである。『時慶卿記』文禄二年四月の日記を一部摘出する。

十一日 ……御千句次第兩人シテ書認候、及鶏鳴御物語等在之、広橋中納言・源中納言等御前二伺候候、御千句

題月第八ヲ被下、勅筆也

十四日 …… 千句一順次第、於御前書直候、又逆字被染勅筆ヲ拝領、…… 御千句延引ト被仰出

十六日 …… 臨江齋へ発句談合ニ行、…… 仮名遣、禁中へ御借用紹巴本則被返、分韻ハ御抑留候、又発句ヲ紹巴へ遣、無返事

十七日 天晴、紫竹二人召遣聖門へ参候、発句懸御日候、紹巴へ又発句ミセ候、転作（添削）在之、芍薬一本遣候、分韻書写候…… 発句ノ事ニ紹巴迄切々行候、玄仍へモ相尋候処、宇治へ被越ト云々

十八日 天晴、禁中へ早辰ニ参勤、発句定在之、亥刻ニ帰宅候、第十迄一順返候

十九日 …… 韻字歌ノ頭書ヲ作ス

廿日 …… 天晴、禁中御千句初寅刻ニ参勤、秉燭ニ果、如例内々ノ番処ニテ午二時急□時粥アリ

廿二日 天晴、如昨日□参勤、休息同、今□ハ准后ヨリ御賜^{マカサレ}被仰付候、子細在之、申刻ニ満、正親町院為御追善ニ候、追加ト云事ハ無之ト、千句斗也

この千句興行は約十日前から準備に取りかかり、天皇のもとで全体の次第が決められ、天皇自ら各百韻の題を書いた。一度延期することとなつて、その間に発句を作つておくが、時慶は紹巴などに見せて教えを求めた。そして発句を決定

していよいよ当日に臨んだのである。

二回目ともなると天皇も自信を付けたのであろう、準備段階から積極的で主導的な姿勢が看取される。その情熱の理由はもう一つ、記録の最後の部分に「正親町院為御追善ニ候」とあるように、当年一月に没した先代天皇であり祖父である正親町院の、追善のための千句張行であることも大きかった。

西洞院時慶が執筆を勤めた前回の和漢千句の時は詳細な記録を残したが、今回は当日の様子はあまり日記では触れられず、中日記事自体が欠けている。千句興行は通常三日間にわたつて三百・四百・三百のペースで行われ、追加を詠む場合もある。この第六である【七】は、二日目の二十一日の午後に巻かれたと思われる。

連衆全十一人のうち、不詳の清斎と十八歳の舟橋秀賢を除き、他の九人は前回の和漢千句に参加しており、天皇の周りには和漢聯句を嗜む文人集団があった。このメンバーには公卿が多く、五山禅僧は有節瑞保と英甫永雄の二人と少ない。何人もの五山高僧を前日夜に招集した前回の千句興行と比べると、さほど規模は大きくない。しかしながら英甫（四十七歳）は天正八年（一五八〇）以前から多くの和漢聯句会で活躍しており、有節（四十六歳）もしばしば名前を連ねていたので、漢句の代表的作者だったのである

う。詩歌に長じた大納言日野輝實や江戸初期の代表的文化人とされる近衛信尹など、盛會に相応しい顔ぶれである。

『連歌総目録』より本千句の発句を抄出すると、(一)「庭に植し行衛は花のうてな哉」、(二)「花の色さやかにしつゝ汀哉」、(三)「惜春花昨夢」、(四)「雨ならてうるほす袖や郭公」、(五)「初音にもふるきやおもふ郭公」、(六)「孤円空裏月」、(七)「影とむる心の水の月も哉」、(八)「月只旧時色」、(九)「行水の淡雪しるきなかれ哉」、(十)「留跡始山雪」と春(一・二・三)夏(四・五)秋(六・七・八)冬(九・十)の順に四季の変化を呈することが分かる。本千句より先に成立した和漢千句として現在知られる七種(文明十六年二月の禁裏和漢千句、天文二十三年十月の称名院和漢千句、天文二十四年三月太神宮法楽和漢千句、弘治二年八月大覚寺和漢千句、弘治年間策彦紹巴両吟和漢千句、天正十九年四月禁裏和漢千句、天正十九年五月素然永雄両吟和漢千句)のうち、二つの両吟千句を除けば、実は初めての試みである。当時の連歌の流行に従ったものである。なお、近世初期までの和漢千句開催状況についての研究に、深沢眞二「連歌・俳諧の研究―桃山時代の和漢聯句」『私学研修』165・166号、二〇〇五年十二月)がある。

『時慶卿記』などによると、この二年後すなわち慶長改

元とともに、禁裏では定期的な和漢聯句會が始まった。少なくとも慶長元年には四回、同二年に九回、同三年に六回と月次の会として頻繁に開催された。その記録は一旦慶長四年で途絶えるが、同五年からは約十年間、断続的ながら創作活動が続けていたようで、慶長九年九月の三日から五日まで、天皇自身にとつては三度日となる和漢千句を張行している。

この間の禁裏御會の他に、公卿朝臣と五山僧とは個別な創作活動もあった。【十二】慶長八年(一六〇三)十月二十五日漢和百韻と【十一】慶長十一年十二月十七日和漢百韻は、この時期の作品である。

【十二】慶長八年十月二十五日漢和百韻は、【七】から十年後の張行である。当時散位であつた近衛信尹は左大臣、三十九歳、有節五十六歳、秀賢はこの前年に明経博士になつた。鷲尾隆尚はもと四辻季満という名前であり、天正十九年和漢千句の際に時慶と共に執筆を勤めた人であるが、その後勅勘を受けてしばらく名前が見られなくなる。也足こと中院通勝はこの四年前まで勅勘のため丹後滞任し、その間に和漢聯句の鍛錬を重ねたようで、前掲天正十九年五月素然永雄両吟和漢千句を行った(深沢眞二「雄長老と和漢聯句」『国語と国文学』75・15、一九九四年五月)。通

勝は慶長四年に、隆尚は同六年に勅免されて、この時には和漢聯句会に復帰していたのである。梅印は五山僧の聯句に多く見える。連歌作者は時能の他に地下の兼如・兼達・元知も加わっている。阿野実顕は二十二歳。

【十二】慶長十一年（一六〇六）の十二月十七日和漢百韻の連衆は【十二】との重なりがなく、別のグループを成している。【十二】が左大臣近衛信尹を中心とした会であったとすれば、この【十一】は当時辞官した日野輝資をはじめ、息子の資勝（三十歳）そして孫光慶（十六歳）と親子二代が中心となった。以前より近衛邸と日野邸とでは和漢聯句の会合があり、両家は公卿の中でも特に熱心であった。おそらくこの【十一】も日野邸で催され、旧年を締めくくり、新年を待ち望む会だったのであろう。他の参加者として歌人の冷泉為満と禅僧の听叔顕暲・雪岑梵岷はいずれも和漢聯句会の常連であるが、それ以外は不詳である。

さて、後陽成天皇は慶長十六年（一六一一）三月に讓位した。これを機に彼は和漢聯句から離れ、聯句に関心が移った。慶長十六年・十七年・十八年にはそれぞれ九回、十九年には五回以上の開催と並々ならぬ情熱である。参加者は院の弟智仁親王その他、有節や集雲・景洪・古澗など

漢会の常連で、五山僧が大半を占める。なおこの間の聯句作品は『鳳城聯句集』として現存している。

この後元和に入って後陽成院は和漢聯句への意欲が再燃したようで、仙洞御所では聯句会と並行して和漢も嗜んだ。本書収録【一】と【二】はこの時期の作品である。『中院通村日記』には【一】について言及はあるものの、欠席したため詳しくない。【二】については、

二月八日、於仙洞御和漢、辰刻始未刻終之、来月六日七日八日和漢御聯句為稽古云々

と記し、千句のための練習として行ったことが分かる。そして予定通りに翌三月の六日から三日間で、ついに後陽成院主催の四度目の和漢千句興行が催行された。『泰重卿記』から参加者が書かれた四日目の項のみ抄出する。

四日 雨天、午晴、於仙洞和漢千句御興行、今日発句定、予内々御約束聴聞二同公仕候也、帰二一条殿致伺公候、御連衆八条殿（智仁親王）、竹門（良恕親王）、西洞院父子時慶卿・時直朝臣、阿野実顕卿、冬降朝臣（滋野井）、詮平、賀茂衆也、五岳藤長老（集雲守藤）・保長老（有節瑞保）・稽長老（古澗慈稽）・益長老（堅峰紹益）・柔長老（剛外令柔）・良西堂（最岳元良）、次第不同也、執筆中院宰相通村卿・右衛門佐永慶朝臣（高倉）兩人也

翌元和二年は少なくとも二月までには三回の張行が確認され、その一つが【六】である。先の翻刻で本百韻の日付を正月二十一日と『連歌総目録』に統一したが、実際は二十八日である。【一】・【二】・【六】そして右の千句も含めて、連衆はほぼ同じ顔ぶれで、特に禪僧側の充実が目立つ。例えば禁裏で三体詩の講釈を行った古潤など、当時一流の素養を持つ面々が集った感がある。先の数年間の集中的な聯句活動を通して五山僧との交流が一層強まったばかりでなく、院自身も漢詩文側の教養を高め、いよいよ円熟に達したと推測される。ところがこの半年後、以前より患っていた病が悪化して四十七歳で崩御したのである。

後陽成天皇は、戦国から江戸への歴史の転換期において、歌学の伝承、慶長勅版の刊行などで文化史に大きな功績を残したと評価されてきたが、その文化的・文学的功績としては新たに和漢聯句史上における役割を加えなければならない。右に述べてきたように二十代前半から最晩年まで持続的な創作活動が行われ、ことに四度にも及ぶ和漢千句興行は空前絶後の大挙である。当時の連歌文芸の流行・成熟や禪僧による漢詩文学の発達など、文壇全体の気運があったことは言うまでもないが、天皇の資質と情熱こそ中世末期から近世初頭の和漢聯句文芸を牽引したことは疑う余地がない。

後陽成天皇の讓位を受けて即位した後水尾天皇は、和漢聯句への情熱も継承している。『言緒卿記』慶長十七年（一六二二）閏十月二日条に「御前漢和」と見え、翌十八年六月二十八日項に「禁裏和漢聯句」とあるので、この頃（十八歳）から和漢聯句を始めている。以後延宝八年（一六七九）に八十五歳で崩ずるまでの長い生涯を通して、和漢聯句に携わっていた。中でも寛永期には十二年七月某日の和漢独吟百韻、十三年五月十三日から十五日まで仙洞和漢千句など、精力的な活動ぶりを見せている。また和漢にわたる彼の文芸活動は多彩である。寛永九年の一年間は、毎月二十五日に「北野法楽詩歌会」を催行した。そして寛永十四・十五年には集中的に仙洞聯句会・詩歌会を行った。和漢聯句と異なった歌と詩の関わり方を実践したことは、和漢聯句制作への刺激となっていたことであろう。

【十二】寛永十五年十二月二十六日和漢百韻を制作した当時は天皇は四十六歳、詩歌両方の経験を生かして、和句だけでなく漢句も出している。「阿野前大納言」阿野実頭は五十八歳、「滋野井中納言」滋野井季吉（冬隆）は五十三歳、ともにかつて後陽成天皇の御会に参加しており、また「前関白」近衛信尋や、古潤の法嗣である九岩など新しい世代の作者も現れた。

なおこの後、後水尾院は晩年まで多くの作品を残したよう
うで、平松文庫『連歌和漢和』(7/レ/21)・『連歌和
漢和』(7/レ/22)にその作品が残る。さらにその周
辺では、禅院での詩会が盛んであり(朝倉尚『禅林の文学』
清文堂、二〇〇四年)、公家を交えた聯句会も活発であっ
た。同じく平松文庫の『聯句集』(7/レ/24)・『聯句集』
(9/レ/1)にその作品が残る。

最後に、年期不詳の作品については、連衆の没年から大
まかに推定すると、【十】は慶長十二年以前(西咲)、【三】
は慶長十六・十九年(時慶の官職と秀賢の没年)、【九】・
【四】・【五】はいずれも元和七年以前(集雲)で、さら
に【四】・【五】は慶長十二年以後(日野輝資の出家)、と
思われる。【八】は推定しかねるが、やはり元和年間のも
のであらう。

【作者】

以下に作品ごとに連衆の姓名生没年等を掲げる。

【一】元和二年正月十二日
太上天皇(十二句)

後陽成院、元龜二年(一五七一)生、元和三年(一六一
七)八月没。天正十四年に即位し、慶長十六年に政仁親

王(後水尾天皇)に譲位して太上天皇となる。
集雲(八句)

集雲守藤、僧侶(臨濟)。天正十一年(一五八三)生、元
和七年(一六二二)没。慶長二年に東福寺二二三世。

式部卿宮(十句)

八条宮智仁親王、天正七年(一五七九)生、寛永六年(一
六二九)没。後陽成院の弟、一字名は色。細川幽斎から
古今伝授を受け、後水尾天皇に相伝した。

古礪(八句)

古澗慈稽、僧侶(浄土)。天文十二年(一五四四)生、
寛永十年(一六三三)没。慶長十三年に南禅寺住持。

曼殊院宮(十句)

良恕親王、天正二年(一五七四)生、寛永二十年(一六
四三)没。一字名、東。後陽成院の弟。

平宰相(一句)

西洞院時慶、公家。天文二十一年(一五五二)生、寛永
十六年(一六三九)没。平氏。一字名、木。子、時直。
天正十九年従三位、慶長十六年右衛門督、従二位。

友隣(六句)

三江紹益、僧侶(臨濟)。元龜二年(一五七二)生、慶
安三年(一六五〇)没。道号三江、号友竹・友林・友雲、
また益長老と称す。建仁寺住持。

阿野宰相中將（八句）

阿野実顯、公家。天正九年（一五八一）生、正保二年（一六四五）没。慶長十七年に参議、左中將、同十九年從三位。

剛外（六句）

剛外令柔、僧侶（臨濟）。永祿六年（一五八三）生、寛永四年（一六二七）没。慶長十五年（一六四〇）世。時直（七句）

西洞院時直、公家。天正十二年（一五八四）生、寛永十三年（一六三六）没。一字名、寸、西洞院時慶の男。元和五年從二位、寛永二年参議、同八年從二位。後水尾天皇に近侍した。

詮平（七句）

鳥居大路詮平、神職。天文二十一年（一五五二）生、元和五年（一六一九）没。後陽成天皇や智仁親王の連歌・和漢聯句に多く加わる。

有節（八句）

有節瑞保、僧侶（臨濟）。天文十七年（一五四八）生、寛永十年（一六三三）没。听叔顯暲の師。相国寺九十三世。鹿苑寺住持。

永慶（一句）

高倉永慶、公家。天正十九年（一五九二）生、寛文四年

（一六六四）没。三条西実枝の女を母とする。元和九年に從三位。

【二】元和二年二月八日

曼（八句） 前出「曼殊院宮良恕親王」

剛（七句） 前出「剛外令柔」

阿（七句） 前出「阿野宰相中將」

時（七句） 前出「西洞院時直」

友・友隣（六句） 前出「三江紹益」

良・元良（七句）

最岳元良、僧侶（臨濟）。生年未詳、明暦三年（一六五七）没。元和九年南禅寺二七四世。

右（六句） 「右衛門督」の略か、前出「平宰相」

冬隆（六句）（翻刻で「冬澄」と誤り）

滋野井季吉、公家。天正十四年（一五八六）生、明暦元年（一六五五）没。名、初め冬隆、のち季吉。一字名、土。寛永四年從三位、同十九年正二位、同二十年権大納言。連歌を嗜む。

通村（一句）

中院通村、公家。天正十五年（一五八七）生、承応二年（一六五三）没。源氏。一字名、水・菊・山、後十輪院と称す。中院通勝の男。慶長二十年從三位。

【三】

古（十一句） 前出「古潤慈稽」

照高院宮（八句）

興意親王、天正四年（一五七六）生、元和六年（一六二〇）没。一字名、云・照、聖護院宮・照高院宮と号す。

後陽成院の弟。天正十九年に聖護院に入り得度、後に照高院を継承した。

曼（九句） 前出「曼殊院宮良恕親王」

梅心（九句）

梅心正悟、僧侶（臨濟）、南禪寺歸雲院。

秀賢（八句）

舟橋秀賢、公家。天正三年（一五七五）生、慶長十九年（一六一四）没。清原氏。弟、元麿・有雅。慶長六年に

家名を高倉から舟橋に改めた。同七年明経博士、慶長十八年従四位上。後陽成天皇・後水尾天皇の侍読として仕えた。

有（八句） 前出「有節瑞保」

詮（七句） 前出「鳥居大路詮平」

院（十句） 前出「後陽成院」

泰重（六句）

土御門泰重、公家。天正十四年（一五八六）生、寛文元

年（一六六一）没。元和三年正五位下、元和六年従四位下、寛永四年従四位上、同八年正四位下。

右衛門督（八句） 前出「西洞院時慶」

令悦（八句）

怡伯令悦、僧侶（臨濟）。生没年不詳、東福寺。文禄・慶長年間の五山禅僧による聯句に多く参加。

実頭（七句） 前出「阿野実頭」

通村（二句） 前出「中院通村」

時（二句） 西洞院時直か

【四】

入道大納言（八句） 日野輝資か

日野輝資、公家。弘治元年（一五五五）生、元和九年（一六二二）没。一字名、生。子、資勝。天正十五年権大納言正二位、慶長八年辞官、同十二年出家。

集雲（十句） 前出「集雲守藤」

秀賢（九句） 前出「舟橋秀賢」

昌琢（九句）

連歌作者、天正二年（一五七四）生、寛永十三年（一六三六）没（一説寛永十一年没）。昌叱の男。母は紹巴の娘、祖父は昌休、弟は昌侃。慶長頃から連歌界の第一人者となり、寛永二年に後水尾天皇より古今伝授を受けた。

色（八句） 前出「八条宮智仁親王」

云（八句） 前出「興意親王」

古礪（九句） 前出「古澗慈稽」

友竹（八句） 前出「三江紹益」

東（九句） 句上は八とする） 前出「良怨親王」

听叔（七句）

听叔顯暉、僧侶（臨濟）。天正八年（一五八〇）生、明曆四年（一六五八）没。法諱、周暉・中暉、のち顯暉。

道号、听叔。日野輝資の男。鹿苑院主・相国寺九四世住持・等持院住持など。

靈圭（七句）

雲岳靈圭、僧侶（臨濟）、生没年不詳。玄圃靈三の弟子、南禅寺天授庵主。

玄仲（七句）

連歌作者、天正四年（一五七六）生、寛永十五年（一六三八）没。紹巴の次男、玄仍の弟。

元通（二句） 勸修寺元通か

【五】

集雲（十二句） 前出「集雲守藤」

入道（二句） 前出「日野輝資」

云（八句） 前出「興意親王」

古礪（十一句） 前出「古澗慈稽」

友（十句） 前出「三江紹益」

圭（二句） 前出「雲岳靈圭」

色（十句） 前出「八条宮智仁親王」

紹由（八句）

佐野紹由、商家・連歌作者。生年未詳、元和八年（一六二二）没。紹巴について連歌を学び、昌琢と親しい。

慶純（七句）

連歌作者、生没年未詳。紹巴の門人。
有節（二句） 前出「有節端保」

昌琢（十句） 前出

昌儼（八句）

連歌作者、元龜三年（一五七二）生、寛文五年（一六六五）没（一説天正十六年生、慶安四年没）。里村氏、名、景次。号、昌倪。昌叱の次男、昌琢の弟。玄的について

連歌を修めた。

听叔（十一句） 前出「听叔顯暉」

元通（二句） 前出

【六】元和三年正月二十一日（27〜50作者名欠）

照 前出「照高院興意親王」

有 前出「有節端保」

曼 前出「曼殊院宮良恕親王」

右 前出「西洞院時慶」

三・三級

僧侶（天台）、生没年未詳。中院通為の男。母、三条西

公衆の女。兄、中院通勝。

太 前出「太上天皇後陽成院」

集 前出「集雲守藤」

古 前出「古潤慈稽」

時 前出「西洞院時直」

忠定

清水谷実任、公家。天正十五年（一五八七）生、寛文四年（一六六四）没。名、初め忠治・忠定、のち実任。出家して素快と号す。

友 前出「三江紹益」

剛 前出「剛外令柔」

詮 前出「鳥居大路詮平」

言緒

山科言緒、公家。天正五年（一五七七）生、元和六年（一六二〇）没。元和三年従二位、同五年参議。

【七】

有節（十二句） 前出「有節瑞保」

日大・日野新大納言（九句）

日野輝資、公家。弘治元年（一五五五）生、元和九年（一六二二）没。一字名、生。子、資勝。天正十五年権大納

言正二位。慶長八年辞職、同十二年出家。

英・英甫（十一句）

英甫永雄、僧侶（臨濟）。天文十六年（一五四七）生、

慶長七年（一六〇二）没。通称、雄長老。母方の叔父に

細川幽斎。建仁寺、南禅寺住持。

聖・聖護院准后（九句） 前出「照高院宮興意親王」

清・清斎（十一句） 不詳

無記・御製（十三句） 後陽成天皇、前出「後陽成院」

新三・新三位（八句） 前出「西洞院時慶」

右督・右衛門督（八句）

高倉永孝、公家。永禄三年（一五六〇）生、慶長十二年

（一六〇七）没。一字名、子。藤宰相と称す。高倉永相

の男。子、永慶。天正十一年右衛門督、天正十四年に従

三位。

前左・前左大臣（十）

近衛信尹、公家。永禄八年（一五六五）生、慶長十九年

（一六一四）没。名、信基、天正十年に信輔と改名、慶

長四年以降は信尹。一字名、杉。天正十三年左大臣従一

位、同二十年左大臣を辞す。文禄三年に後陽成天皇から

勅勘を蒙り、慶長元年に許されて帰京。慶長六年に左大臣復帰、同年閏白、准三宮。江戸時代初期の代表的文人。

広・広橋中納言（八句）

広橋兼勝、公家。永禄元年（二五五八）生、元和八年（一六二二）没。一字名、喬・貢。天正十年権中納言、慶長二年権大納言、元和四年内大臣。
清秀・清原秀賢（二句） 前出「舟橋秀賢」

【八】

友林（十一句） 前出「三江紹益」

梧（十二句）

近衛信尋、公家。慶長四年（二五九九）生、慶安二年（一六四九）没。一字名、梧。後陽成天皇の第四皇子、近衛信尹の養子。後水尾天皇は同腹の兄。慶長十九年右大臣、元和六年従一位左大臣、同九年閏白、寛永六年辞退か。後水尾天皇を中心とする学問・文学・芸術活動の中にあつて主要な役割を果たした。

水（十句） 前出「中院通村」

舜岳（十一句）

舜岳玄光、生没年未詳。天竜寺光西堂住持。

英岳

英岳景洪、僧侶（臨濟）。生年未詳、寛永五年（一六二八）没。英叔周洪とも。元和七年南禅寺二七二世。

光勝（九句）

周南円旦、僧侶（臨濟）。生年未詳、正保四年（一六四七）没。法諱、初め光勝、のち円旦。

昌侃（十句） 前出「昌儼」

宗順（九句）

連歌作者、生没年未詳。内侍原氏、号宗順。慶長・元和年間の連歌に多数参加。

玄的（九句）

連歌作者、文禄二年（二五九二）生、慶安三年（一六五〇）没。玄仍の男。母、昌叱の女。『漢和差合』の著者。

梵峯（九句）

雪岑梵峯、僧侶（臨濟）。生年未詳、寛文三年（一六六三）没。法諱、梵峯・梵金。

執筆・正忠（一句）

寺田無禅。天正八年（二五八〇）生、元禄四年（二六九

一）没。近衛家に仕えた。

【九】

兼如（十二句）

連歌作者、生年未詳、慶長十四年（二六〇九）没。号、

兼如・是斎。紹巴に師事して『源氏物語』の講釈を受け、また細川幽斎から古今伝授を受ける。

玄召（七句）

棠陰玄召、僧侶（臨濟）。文禄元年（一五九二）生、寛

永二十年（一六四三）没。元和九年東福寺二・三五世。

有節（十句） 前出「有節瑞保」

紹由（九句） 前出「佐野紹由」

宗順（九句） 前出

兼達（九句）

連歌作者、生没年未詳。慶長初年の連句に名前が見える。

猪苗代家の人か。

集雲（十句） 前出「集雲慈稽」

惟舟（七句）

僧侶（臨濟）。生没年不詳。文禄・慶長年間の五山禅僧

の聯句に名前が見える。

友竹（九句） 前出「三江紹益」

中倬（八句） 前出「听叔顕倬」

意運（九句） 不詳。慶長十六年五月二十九日賦千何連歌

に一座している。

令順（一句） 不詳

西咲（十二句）

西笑承兌、僧侶（臨濟）。天文十七年（一五四八）生、

慶長十二年（一六〇七）没。号、月浦・南陽。兌長老と

称す。天正十二年相国寺九二世。慶長二年相国寺鹿苑僧

録に再任。

喬（九句） 前出「広橋兼勝」

閑室（九句）

閑室元估、僧侶（臨濟）。天文十七年（一五四八）生、

慶長十七年（一六一二）没。号、三要、估長老と称す。

生（八句） 前出「日野輝資」

芳（八句）

勧修寺光豊、公家、連歌作者。天正三年（一五七五）、

慶長十七年（一六一二）没。勧修寺晴豊の男。慶長九年

権中納言、同十七年権大納言、従二位。

中倬（八句） 前出「听叔顕倬」

竹郷（九句）

不詳。「竹門」すなわち竹内門跡（良恕親王）の写し間

違いか。

玄仍（十一句）（句上に「玄沙」と記す）

連歌作者、元龜二年（一五七二）生、慶長十二年（一六

〇七八）没。紹巴の長男。妻、昌叱の女。子、玄陳・玄

的。女、昌琢の妻。慶長七年、紹巴から古今伝授を受け

【十】

た。

昌琢（十句） 前出

承章（七句）

鳳林受章、僧侶（臨濟）。文禄二年（一五九三）生、寛文八年（一六六八）没。号、竹窠。叔母に後陽成天皇の生母新上東門院藤晴子がいる。西笑承兌につき得度、のちに鹿苑寺、相国寺の住持、また南禅寺住持の公帖を受ける。後水尾天皇・金森宗和・林羅山らの文化人と親交があった。

友益（八句）

速水友益、連歌作者。弘治三年（一五五七）生、慶長十二年（一六〇七）没。慶長二年従四位下。紹巴・昌叱・玄仍・昌琢との連歌作品が多い。

良益（一句） 不詳

【十一】慶長十一年十二月十七日

生（十五句） 前出「日野輝資」

中・中暉（十二句） 前出「听叔顥暉」

貝（十二句）

日野資勝、公家。天正五年（一五七七）生、寛永十六年（一六三九）没。一字名、貝（貝とも）。日野輝資の男。子、光慶。慶長十九年権大納言、元和五年正二位。

令（十二句）

冷泉為満、公家、歌人。永禄二年（一五五九）生、元和五年（一六一九）没。上冷泉とも、名は初め為房、のち為満。天正十三年に山科言継らとともに勅勘を蒙り、慶長五年に為満勅免。

玄・瑞玄（十二句）

生没年未詳。天台僧侶か。

峯・梵峯（十二句） 前出「雪岑梵峯」

糸（十一句） 不詳

（山田孝雄『連歌概説』（岩波書店、昭和十二年）に一字名を「糸」とした連歌作者に、堤輝長・下冷泉為経・冷泉為綱を挙げているが、いずれも生年が本百韻成立の後である。）

松・宗松（二句） 不詳

温・寿温（十二句） 不詳

慶・光慶（二句）

日野光慶、公家。天正十九年（一五九二）生、寛永七年（一六三〇）没。一字名、精。日野資勝の男。慶長十九年参議、元和五年権中納言、同六年従二位。

【十二】慶長八年十月二十五日

有節（十二句） 前出「有節瑞保」

杉（十六句） 前出「近衛信尹」

兼如（十句） 前出

梅印（十一句） 前出

梅印元冲、僧侶（臨濟）。生年未詳、慶長十年（一六〇五）没。細川幽斎の弟。慶長二年南禪寺二六八世。

隆尚・隆尚朝臣（七句）

鷺尾隆尚、公家。永禄九年（一五六六）生、慶長十三年（一六〇八）没。初め四辻季満、天正十七年参議、天正十九年勅勘を蒙り出奔。慶長六年勅免されて出仕、鷺尾隆尚と改名。

秀賢・清原秀賢（七句） 前出「舟橋秀賢」

也足・入道前侍従中納言（十句）

中院通勝、公家。弘治二年生（一五五六）、慶長十五年（一六一〇）没。一時名、菊。号、也足軒。法名、素然。母は三条西公条の女。子、通村。天正七年に権中納言兼侍従、正三位。翌八年に正親町天皇の勅勘を蒙り丹後へ出奔、そこで細川幽斎から古今伝授を受けた。同十四年に出家。慶長四年に勅免され出仕。

時能（十句）

僧侶（天台）・連歌作者。生没年未詳、室町末期の人。

紹巴の門人。

兼達（八句） 前出

元知（八句）

俳人、生没年未詳。江戸初期の人。玄仲に連歌を学んだ。

実顕（二句） 前出「阿野実顕」

【十三】寛永十五年十二月二十六日

前関白（十一句） 前出「近衛信尋」、四十歳。

棠陰（十二句） 前出「玄召」

光勝（十一句） 前出「周南円旦」

阿野前大納言（十一句） 前出「阿野実顕」

無記・御製（十九句）

後水尾天皇、文禄五年（一五九六）生、延宝八年（一六八〇）没。名、政仁。追号後水尾院。後陽成天皇の第二皇子。母、中和門院藤前子（関白近衛前久の女）。中宮、東福門院源和子（将軍徳川秀忠の女）。慶長五年親王宣下、同十六年に即位。寛永六年に讓位、在位十八年。以後、没するまで院政を行った。寛永二年智仁親王から古今伝授を受けた。当時は上皇。

滋野井中納言（十句） 前出「冬隆」

最岳（十三句） 前出「良・元良」

九岩（十一句）

九巖中達か。僧侶（臨濟）、生年未詳、万治四年（一六六一）没。古潤慈稽の法嗣。寛永二年に建仁寺三〇〇世。

定逸（一句）

野宮定逸、公家。慶長十五年（一六一〇）、明暦四年（一六五八）没。初め花山院氏、定逸より野宮氏を称す。花

山院忠長の次男。寛永十二年正四位下。

（よう　こんほう・日本学術振興会外国人特別研究員）